

～ 第 24 回パッションフルーツ品評会の審査講評 ～

今年の小笠原パッションフルーツ品評は、6月13日に農産物観光直売所会議室において開催され、農協や小笠原村、亜熱帯農業センター及び営農研修所を含む小笠原支庁産業課の計7名が審査員を務めました。出品数は全9点で、いずれも母島からの出品でした。審査項目は、果実の形状や光沢、熟度、品質の揃い、傷の有無や消費者ニーズなどの商品性とし、これらを総合的に評価しました。また今回の品評会は、収穫盛期を過ぎた時期の開催となり、熟度や品質を揃えるのが大変な中、どの出品物も高い品質を保持していました。中でも、金賞を受賞した出品物は、光沢が他の出品物と比較しても傑出しており、品質の揃いも申し分ない逸品でした。銀賞や銅賞を受賞した出品物も素晴らしく、形状や品質の揃いもよかったのですが、果実下部付近に傷や擦れた跡がわずかに見られたことが金賞との差になりました。贈答用出荷箱での審査ということで、揃いや箱への詰め方なども重要になりますので、次回はこれらも意識していただくと、小笠原パッションフルーツのブランド価値がさらに向上するものと感じました。

小笠原のパッションフルーツは、国内随一と言える食味や外観を有しております。5月に開催された東京諸島のイベント「島じまん」でも早々に完売するなど、小笠原を代表する特産品として島内外を問わず好評を博しています。最近ではパッションフルーツの知名度も上昇し、消費者の需要も高まっていると感じられ、そうした需要を的確に捉えられているこの状況は、小笠原で長年蓄積されてきたパッションフルーツの栽培技術とそれに裏付けされた高い品質によるものと実感しております。小笠原の生産者に敬意を表するとともに、今後益々のブランド価値向上を期待いたします。 <所長：北山>



写真 金賞（小松朗生農園）の出品物

金賞	小笠原村長賞	母島	小松朗生	農園
銀賞	小笠原支庁長賞	母島	松 本	農園
銅賞	農協組合長賞	母島	さ ち	農園

～ ムニンフトモモの挿し木用土の検討 ～

小笠原亜熱帯農業センターでは自生種の回復に向けて安定的な増殖技術の研究を行っています。ムニンフトモモ (*Metrosideros boninensis*) は小笠原に自生する種の中でも貴重な固有種の 1 種で、絶滅が危惧されるほど数を減らしています。本稿では、ムニンフトモモの安定的な増殖技術開発として行った、挿し木用土試験の結果を報告します。

●試験方法

2024 年 2 月 27 日に旭山でムニンフトモモの枝を採取し、緑枝 5 節 (6～8cm 程度) の先端の両側をナイフで削ぎ数時間水に浸けてから挿し穂として試験に使用しました。それぞれの用土 (試験区) を用いた挿し床に各 6 個体を葉数 2 枚にして挿し木しました。挿し木後は、農業センターのミスト室の遮光下 (遮光率 50%) で十分灌水して管理し、生存率、発根率、葉数、根張りを調査しました。

●試験区

- 1 バーミュキュライト (以下, V)
- 2 小笠原の細粒赤色土 (以下, 赤土)
- 3 赤土: バーミュキュライト=1:1 (以下, 赤 V)
- 4 赤土: 堆肥: パーライト=5:2:1 (以下, 赤堆パ)
- 5 赤土: 堆肥=5:2 (以下, 赤堆)
- 6 赤土: パーライト=5:1 (以下, 赤パ)

●試験結果 (表 1)

①V と赤土、赤 V

V よりも赤土で生存率が 10%程度高く、発根が早かったです。赤 V では 7 月まで生存率 100%でしたが、8 月に V と同等

になり、発根の速さは赤と V の中間でありましたが、根張りがやや弱かったです。

②赤土と赤 V、赤堆肥、赤堆パ、赤パ

生存率は 6 月で赤堆パ、赤パ、赤 V が 100%と高かったのですが、8 月では赤土が最も高くなりました。発根の速さは赤パが最も早く、6 月の発根率は赤パ、赤堆パ、赤 V で 100%, 赤土、赤 V で 83%となりました。8 月の根張りは赤土、赤パに次いで赤堆、赤 V が高い結果となりました。赤堆パと赤堆の生存率は 6 月以降で急減しました。

●まとめ

ムニンフトモモの春挿し木には、バーミュキュライトよりも赤色土の方で生存率が高く、発根も早いという結果になりました。また、赤色土にパーライトまたはパーライトと堆肥を混合すると発根は早まりましたが、高温期以降の生存率が低下しました。

表 1 挿し木用土がムニンフトモモの生存・発根に及ぼす影響

挿し床	項目 a	開始日	調査日			
		2/27	4/4	6/5	7/22	8/19
V (バーミュキュライト)	生存率 (%)	100	83	67	67	67
	発根率 (%)	0	0	67	67	67
	根張平均	0.0	0.0	2.8	2.8	2.8
	葉数平均	2.0	2.0	2.0	1.8	1.8
赤土	生存率 (%)	100	83	83	83	83
	発根率 (%)	0	50	83	83	83
	根張平均	0.0	0.6	2.0	2.0	2.8
	葉数平均	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
赤V (1:1)	生存率 (%)	100	100	100	100	67
	発根率 (%)	0	17	100	83	67
	根張平均	0.0	0.2	1.8	1.2	2.0
	葉数平均	2.0	2.0	2.0	1.7	1.5
赤堆パ (5:2:1)	生存率 (%)	100	100	100	0	0
	発根率 (%)	0	67	100	0	0
	根張平均	0.0	0.7	2.0	0.0	0.0
	葉数平均	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0
赤堆 (5:2)	生存率 (%)	100	100	83	33	17
	発根率 (%)	0	50	83	33	17
	根張平均	0.0	0.5	2.0	2.0	2.0
	葉数平均	2.0	2.0	1.8	2.0	1.0
赤パ (5:1)	生存率 (%)	100	100	100	50	50
	発根率 (%)	0	83	100	50	50
	根張平均	0.0	0.8	1.7	1.5	2.7
	葉数平均	2.0	2.0	1.5	1.3	1.3

a) 生存率・発根率は供試個体数を分母にした割合で示す。根張り・葉数は生存個体の平均で示した。根張りは増地からの抜けにくさを 0 (発根なしですぐ抜ける), 1 (弱: 発根ありで抜ける), 2 (中: やや力を入れて抜ける), 3 (強: 抜けずに増地ごと持ち上がる) で指数化した。

<自生種担当: 板橋>

～ 小笠原への侵入が警戒される病害虫について ～

今回はまだ、小笠原に侵入していない害虫について紹介します。

<トマトキバガについて>

トマトキバガは、南米原産の小型のガの仲間です。令和3年以降国内で発生が確認され、東京都多摩地域では令和6年にフェロモントラップへの誘殺が確認されました。

●形態



成虫:体長5～7 mm 終齢幼虫:体長約8mm
(植物防疫所原図)

●被害

トマトでは、茎葉では内部に幼虫が潜り込み、絵描き状の食害痕を示します。果実では、幼虫が潜り込んで内部組織を食害し、食害部分が腐敗して果実品質が著しく低下します。

寄主植物はトマト、ナス、パレイショ等のナス科植物のほか、マメ科のインゲンマメも寄主植物として報告されています。



トマト果実および葉の被害
(植物防疫所原図)

●防除

トマトまたはミニトマトでは、トマトキバガに登録のある薬剤を使用します。被害葉および被害果はほ場に放置せず、土中に深く埋めるか、ビニール袋等に入れて密封すること

で、寄生した成幼虫を死滅させたくて、適切に処分しましょう。

<セグロウリミバエについて>

セグロウリミバエは、過去に小笠原から根絶されたミカンコミバエと同じミバエ科の害虫です。令和6年に沖縄本島地域に侵入し寄生果実が確認され、令和7年4月から緊急防除が行われています。

●形態



成虫:体長8～9 mm 幼虫:体長7.5～9.0 mm
(植物防疫所原図)

●被害

幼虫が果実に寄生すると果実内部を食害することによって商品価値を著しく低下させます。

主な寄主植物は、ウリ科（キュウリ、カボチャ等）ですが、海外では、トウガラシ、トマト、グワバ、インゲンマメ、パッションフルーツ、パパイヤ等への寄生も報告されています。

●防除

不要果実や果実残渣は、放置するとセグロウリミバエの発生源になるため、適切に処分しましょう。

<最後に>

島外からの苗等の導入には新たな病害虫が寄生しているリスクがあるため、慎重にご検討ください。また、見慣れない虫や症状を見かけたら農業センターや営農研修所にご連絡ください。 <病害虫担当：佐々木>

～ ミニトマトの有望品種の特性把握 ～

小笠原では、糖度が高く食味が優れる「甘っこ」の栽培が行われていますが、需要に対し供給が足りていないため、更なる収量増が求められています。そこで、より優れた品質を持ち、収量の増加が見込める品種を求め、「甘っこ」「プチルビー」、「ほれまる」3品種について、栽培特性を明らかにしました。

「甘っこ」と比較して総収量はどちらの品

種も低くなりました。また、「甘っこ」の糖度は他品種より有意に高いという結果が得られました。引き続き小笠原での栽培に適した有望な品種を探していきます。

表1 各品種の果実品質

品種名	糖度 ^a (Brix%)	酸度 ^a (g/100mL)	糖酸比 ^a
甘っこ	10.9	0.7	16.1
プチルビー	10.0 *	0.6	16.5
ほれまる	10.3 *	0.7	15.3

a)*は、「甘っこ」と比較して5%水準で有意差があることを示す(Dunnett法)。

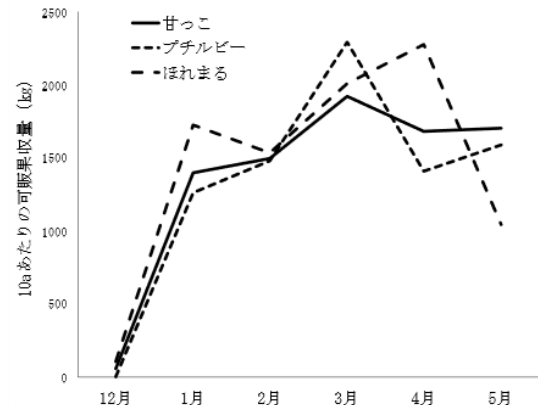


図1 各品種における10aあたりの月別可販果収量

<トマト担当(母島): 直井>

～ 土壌診断の傾向と対策(2025①) ～

今年度1回目の土壌診断を実施しました。診断数は母島6戸17件、父島5戸18件でした。個別の改良対策は農協からお知らせしましたが、土壌養分が蓄積傾向にある圃場がありましたので、簡単な解説と対策について報告します。

作物を栽培している畑では、肥料成分が蓄積していくことがあります。これは、施肥した養分の全てが植物に吸収されるわけではないからです。化学肥料に限らず、堆肥などの有機物でも、施用した分の養分は蓄積します。畑に養分が過剰に蓄積すると、根が伸びにくくなるなど、作物の生育が悪くなります。生育を良くしようとさらに施肥すると、さらに蓄積していくという悪循環に陥ります。養

分は一度畑に入ってしまうと取り出すのは難しいので、養分の投入を抑制することと、奪取することで対策します。投入の抑制では堆肥などを含め、減肥をします。養分を奪取するには、作物残さの持ち出しや、ソルゴーなどの吸収量の多い作物(クリーニングクロップ)を作付け、育った作物を畑から持ち出す等を行います。大事なことは養分過剰にならないように土壌診断等を活用して適正施肥をしていくことです。今年は7月中旬と12月上旬にも土壌診断を予定しています。分からないことがありましたら、農協窓口や営農研修所、亜熱帯農業センターまでご相談ください。

<普及指導担当: 蜷木>

～ 展示エリアの利用方法等について ～

小笠原亜熱帯農業センターでは、研究資料や園芸利用素材として学術的採種・採穂等を可能とするため、小笠原諸島自生植物の保護・増殖および有用植物の収集・評価を行っています。加えて、環境学習や観光業にも寄与する公共施設として、一部植物等を展示し、都民や来島者に公開しています。

平成15年に「展示園およびヤシ園開園要領」を定め皆様にご利用いただけてきましたが、制定から20年以上が経過したことから、この度「展示エリア開園要領」として更新しました。大きな変更点はありませんが、車の進入やペット利用等、ご意見をよく頂戴する事項について詳細を定めました。

支庁ウェブサイト内の「小笠原亜熱帯農業センター展示エリア」ページにも記載しておりますが、こちらにも抜粋を掲載します。

なお、事業者の方向けの特例や申請書等は別に定めております。小笠原村観光協会等を通じてお知らせしますが、ご不明点がございましたら当センターへお問い合わせください。

●利用にあたって

- ・エリア内は徒歩でご利用ください。自転車を含む車両は駐車場をご利用ください。園内への進入は禁止します。車椅子やベビーカーは、利用可能です。
- ・動植物等はその一部のみでも、採取できません。傷つける行為も禁止です。
- ・動植物等へのエサやり、施肥、植え付け、遺棄は禁止です。
- ・犬等の飼育動物を放さないでください。必ずリードやバッグ等を使用してください。
- ・飲酒や喫煙はできません。

- ・園内に危険物を持ち込んだり、施設を壊したりしないでください。
- ・水道を含め園内の設備に触れたり使用したりしないでください(お手洗いは除く)。
- ・ボール遊び等のスポーツはできません。
- ・案内は、説明板や標識、パンフレット等により行っており、説明者は配置していません。ガイドをご希望の方は観光協会等にお問い合わせください。
- ・許可のない、広告や宣伝・物品販売・イベント開催・撮影会等はできません。
- ・園内で発生した事故、トラブル、怪我等、利用者の過失により生じた損害については、一切の責任を負いません。
- ・その他、職員や現地の指示に従ってご利用ください。

●開園日および開園時間

通年開園とし、開園時間は午前8時30分から午後4時30分までとします。ただし、自然災害等の関係で、一部を閉鎖することがあります。

●利用案内



●案内マップ



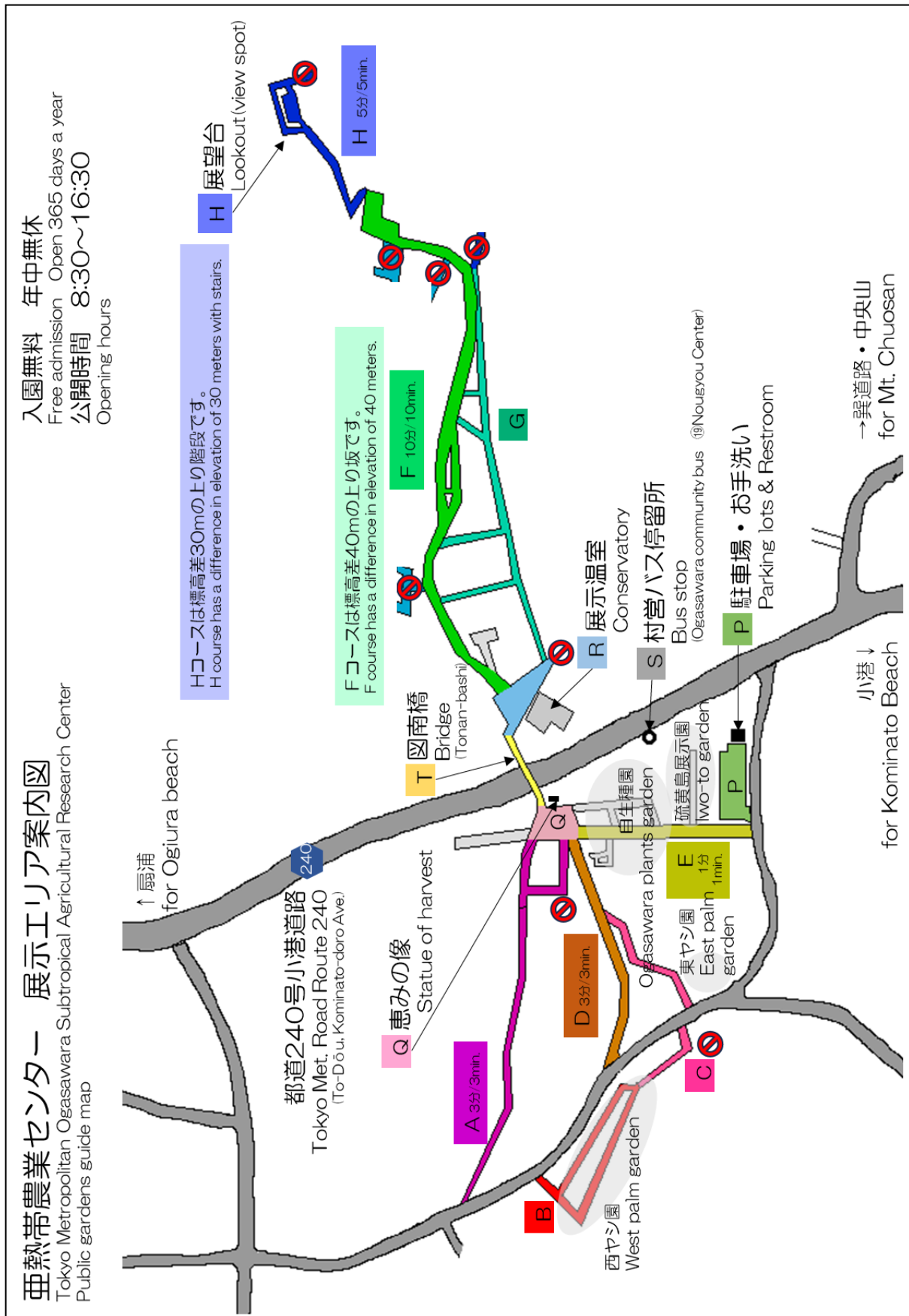
●小笠原支庁Instagram(最新情報等)



園内の写真や動画は

「#亜熱帯農業センター」を
付けぜひご投稿ください！

＜所長：北山＞



(案内図は随時更新します。支庁ウェブサイトからダウンロードできます。)